Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

人新世における人間と非人間との関係に関する考察 ーティモシー・モートンと石牟礼道子を手がかりとしてー

張，凌霄

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2022-09-25
(Date of Publication)
2023-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第8412号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100477838

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

人新世における人間と非人間との関係に関する考察
—ティモシー・モートンと石牟礼道子を手がかりとして—

氏　　名　：　張 凌霄

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名	（主）	中　真生	教授
	（副）	茶谷　直人	教授
	（副）	原口　剛	准教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本論文の目的は、ポストヒューマニティーズエコクリティシズム思想家である T.モートンのエコロジー思想の特徴と意義を見出し、水俣病事件と生物多様性の保全を手がかりとしてモートンのエコロジー思想の限界を明らかにすることにある。モートンは人間が、世界がもはや純粋ではないという事実を受け入れ、非人間と親密かつ非調和的に共存することを望んでいる。しかし、モートンは、人間と非人間との共存が非常に複雑な問題であることを見落としている。このため、筆者はモートンの主張を極端であると考えている。

筆者は、人間と非人間との共存という課題を、人間側と非人間側の両方から考察することが必要であると考えている。モートンは、すべての人間が非人間と切り離せない存在であることを受け入れるべきだと提唱している。しかし、今日の環境危機は全人類の責任なのだろうか。第二に、地理的、経済的、政策的、医療的、職業的、年齢的など多くの要因によって、直面するリスクとその対処能力は個人によって異なる。人間の間の差異を無視して、すべての人間が非人間と共存すべきだと主張するのは、公平と正義の原則に反する。さらに深刻なことは、有毒な非人間と大量に共存する人々が、健康や精神にダメージを受け、愛する人を失い、差別を受ける可能性があることである。一方、モートンの提示する非人間とは、動植物や有毒物質など、人間以外のあらゆるものを指している。人間と有毒物質の共存は本当に可能なのだろうか。また、その場合、有毒物質の量はどの程度なのか。有毒物質と人間の共存を許せば、環境を犠牲にして生産性を上げようとする経済発展モデルに貢献し、環境破壊を悪化させ、社会的不公正を拡大させることにならないか。このような疑問を持ちながら、筆者は水俣病事件と生物多様性の保全を丁寧に考察していくことで、人間と非人間との共生という問題の複雑さを提示する。本論文は六つの章で展開される。

第一章では、モートンの主要な著作である『自然なきエコロジー』から、ダークエコロジー思想の起源、具体的な内容およびそれが示唆する意義について詳しく述べていく。「ネイチャーライティング」(nature writing) による自然環境や雰囲気から啓発を得て、モートンは非人間の考察を始める。モートンは、非人間的なものは人間を取り囲む「アンビエンス」のようなもので、つかみどころがなく、逃れがたいものだと考えている。同時に、モートンは、ネイチャーライティングで描かれた自然は、実は現実には存在しないことを発見した。一九世紀のロマン主義時代における消費主義の影響で、自然も商品になっていた。それゆえ、モートンは、自然を取り去るという文脈で、人間と非人間との非調和的な共存を促したのである。これはダークエコロジーの本旨でもある。モートンの非人間的な概念も、思弁的実在論とオブジェクト指向存在論の影響下で、アンビエンスから奇妙なよそ者、そしてハイパーオブジェクトへと三段階の変化を遂げている。特に、ハイパーオブジェクトは、地球温暖化や核放射線といった環境危機と結びついている。

第二章では、人新世という地質概念に焦点を当てる。人新世はモートンが強く擁護している地質学的な概念である。モートンは、地層に人間の力が入り込んだ人新世が、人間と非人間の絡み合った関係を適切に表していると考えた。しかし、モートンが人新世を唱えたからといって、人間の中心性を認めたわけではないことを筆者は強調しておきたい。むしろモー

トンは、人新世において、人間活動が引き起こした、人間の手に負えない一連の環境危機を通じて、人々が人間の限界を認識し、それによって地球がもはや純潔ではないという事実を受け入れることを期待している。一方、モートンは、人新世の始まりは新石器時代にまでさかのぼることができると考えている。そしてモートンは、人新世の環境危機は、世界中に広がった農業のあり方という「アグリロジスティクス」(agrilogistics) によって引き起こされたと指摘している。しかし、他の学者による人新世の開始時期に関する考察を検討すると、人新世の原因はモートンが提案するような単純なものではないことが明らかにする。人新世は、人間に関する地質学的な概念以上に、歴史、文化、社会、経済の発展と密接に結びついているものである。

第二章では、D.ハラウェイによるクトゥルー新世と J.W.ムーアによる資本新世という人新世に代わる言葉を詳細に検討し分析する。ハラウェイの考えでは、他の種の生物と比較して、人間には特別なものは何もない。人間の力を強調しすぎると、人間と人間以外の生き物との密接な関係を見失いがちになる。ムーアは、人新世によって人間の区別が曖昧になり、環境危機の責任は我々全員にあると思い込んでしまいがちだと主張する。この点についてモートンは、植民地主義が人新世の環境危機を引き起こしたことは認めるが、極端な話、すべての人間が消費主義の影響を受けていると主張する。つまり、モートンは、環境危機の責任は先進国の富裕層だけでなく、すべての人間にあると唱えている。しかし、ムーアは、資本主義的生産様式のもとでは、先住民や奴隷とされたアフリカ人などが人間の領域から排除され、安価な自然の一部となったことを指摘する。人新世の環境危機の責任は、特定の人物ではなく、資本主義的生産様式全体にあるのである。筆者はクトゥルー新世と資本新世が示唆した意義からモートンのダークエコロジー思想の限界を見出した。

第四章では、第三章の主張を受け、ダークエコロジー思想を現実世界の枠組みの中に置き、水俣病事件に対する石牟礼道子の議論を手がかりとしてダークエコロジーの欠点を補うことを試みる。近代工業化の急速な発展は、日本に莫大な利潤をもたらすと同時に、環境汚染による悲劇を引き起こした。水俣病事件はその悲劇の一つである。

水俣病事件で露呈した政府、社会、医療の問題と教訓を提示する石牟礼や宇井純らの議論、リスク社会における有毒物質の許容値に関するドイツの社会学者である U.ベックの考察、川本輝夫および緒方正人らの水俣病被害者と加害企業との闘争などを徹底的に分析して、筆者は人間と非人間との共生の複雑さを提示する。水俣病患者と有機水銀の関係は、まさにモートンの提唱する人間と非人間との非調和的な共存の姿である。モートンとは対照的に、石牟礼は水俣病事件を通して、人間と非人間との共存の複雑さを見抜いている。具体的には、水俣の住民と自然との相互依存関係を見る一方で、水俣病患者と有機水銀との痛ましい共存を見出したのである。水俣病の被害者は有機水銀との共存を素直に受け入れることができなかった。モートンは、被害者の健康や心の傷を無視し、生き延びようとする本能を無視する。工業化によって引き起こされた環境汚染が、自然に依存する水俣の住民に致命的な影響を与えることは無視されている。モートンの提唱する非調和の共存は、金銭と利益が最

優先される産業文明の価値観を促進するものである。筆者は、ダークエコロジーの最も暗い意味は、すでに汚染された部分が修復されないことであると考えている。

第五章では、「生物多様性」という非人間との関係において最も顕著な問題を取り上げ、生物多様性の価値および生物多様性の大量喪失の原因を見出し、生物多様性の保全の意義を提示する。筆者は生物多様性に関する科学的事実を通じて、自然環境が抵抗力と回復力を持っていることを示し、生物多様性の保全が人々の努力に値する事業であることを提唱する。スウェーデンの環境学者であるJ.ロックストロームによると、安全な範囲内で発展すれば、地球は健全な状態に保たれ、自然に取り返しのつかないダメージを与えることはない。一方、筆者は、種多様性が最も高い陸上生態系の熱帯雨林を例に、熱帯雨林の森林が大量に失われる原因を生態学者である J.H.ヴァンダーミーアと L.ペルフェクトの議論を参考にしてまとめる。熱帯雨林の破壊の原因は、不合理な農業転換による技術的・環境的問題だけでなく、その最も根本的な原因は、社会における不平等な発展と貧困の問題である。ラテンアメリカや南アメリカに分布する熱帯雨林は、国際的な経済的・政治的な不利から、先進国の商品作物のプランテーションになっている。作物の市場価値が下がると、プランテーションで雇用されていた現地の人々が失業し、貧困の問題が深刻化する。小作農に復帰した失業者は熱帯雨林に土地を求めざるを得ない。その結果、熱帯雨林の環境問題はさらに悪化する。同じ意味で、環境保護を目的に始めた不買運動も、南側の貧しい国々では失業者を出すことになりかねない。環境危機の完全な解決には、科学技術の合理的な利用だけでなく、社会の公正と貧困の撲滅が必要である。そのためには、筆者は行政、メディア、教育、地域レベルの変革など、さまざまな取り組みが不可欠であると提唱する。このような提唱は、既存の社会構造の中で実現することは難しいが、少なくとも環境危機を解決するために、どのような方向に進むべきかを明らかにすることに役立つだろう。

終章では、以上の検討を通じて明らかになったことをまとめる。モートンにとって、生と死の問題よりも重要なのは、人間の意識の変化である。つまり、人間は自分の認識の有限性を受け入れて、人間的尺度を超えた世界を考えるべきだということである。これこそが、モートンのダークエコロジー思想の意義であると筆者は考えている。しかし、水俣病事件や生物多様性が激減した事実などから、人間と非人間との共存という課題は、モートンが語るほど単純ではないことは明らかである。モートンは、人間と非人間の二つの概念を包括的に二つの集合名詞にまとめ、両者の内部にさまざまな違いがあることを無視した。環境問題を放置すれば、工業化による汚染、国際経済と政治の不均衡による貧富の格差、政府の社会医療メディアの改善、一般市民の権益などの問題が無視される可能性が高い。しかし一方で、SDGs のような持続可能な開発戦略は、資本主義が生産を拡大するもう一つの方法なのではないかという疑問もある。本論文では、人間と非人間の錯綜した関係を明らかにしながら、次のような問題を提示する。環境保全と社会的公正を実現するために、持続可能な開発戦略をどのように機能させるかは、依然として非常に難しい問題である。これは人新世が我々に与えた課題であるだけでなく、筆者が今後研究すべき方向でもある。

［課程博士用］

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	張　凌霄
論文題目	人新世における人間と非人間との関係に関する考察 ―ティモシー・モートンと石牟礼道子を手がかりとして―

要　　旨

本論文は、「ダーク・エコロジー」の提唱者であるティモシー・モートン（1968～）の思想の特徴を描き出すとともに、その一面性と限界を、石牟礼道子の『苦海浄土』が描き出す水俣病の悲惨と自然回復の希求の視点から批判的に考察し、さらに、有機水銀や放射性物質といった毒物と人間との関係に焦点をあてて、生物多様性をめぐる問題の複雑性を際立たせようと試みる論考となっている。

本論文の全体的構成および主たる議論は、以下の通りである――まず、第一部「ダーク・エコロジー思想に関する試論」では、モートンの代表作『自然なきエコロジー』（原著, 2009／日本語版, 2018）に基づき、「ダーク・エコロジー」思想の核心は、ロマン主義的な「純粋なる自然」概念の批判と「人間と非人間の共存」の提唱にあることを確認し、二項対立的存在論に立たない「アンビエンス」から「奇妙なよそ者」へ、さらに「ハイパーオブジェクト」へと三段階の変化を示すその概念的展開を、地球温暖化や核汚染といった環境危機に応じたものとしてその意義を評価するとともに、その主要概念の曖昧さに伴う問題性と限界を指摘する。

続く第二章では、「人間と非人間」の交錯を主題化するモートンの思想を「人新世」をめぐる議論の中に位置づけつつ、環境危機の主たる原因を、新石器時代における農業生産様式（アグリロジスティクス）の発展に見るその捉え方は単純すぎるものであり、「人新世」概念は、社会的・経済的発展とも密接に結びついたものとして捉えられるべきと論じる。

第三章では、D. ハラウェイによる「クトゥルー新世」概念と J. W. ムーアによる「資本新世」概念も視野に入れることにより、より広い枠組からモートンの思想の特徴を検討する。ハラウェイは、人新世をめぐる議論は、全般的に、人間の影響を過大視することによって様々な生物種との密接な関係を見失ってしまう危険性に警鐘を鳴らしており、ムーアは、モートンも依拠している包括的・抽象的な「人新世」概念によって階級差・南北格差などが後景に押しやられしまうさしまうことの問題性を指摘していることを踏まえ、著者はモートン思想の制約を際立たせている。

第四章は、水俣病の実態と被害者の苦しみを主題とした『苦海浄土』に表れている石牟礼道子の自然思想と対比することを通じて、ダークエコロジー思想の限界を浮き彫りにするとともに、その批判的乗り越えの方向を探る。石牟礼や宇井純によって提示された、公害に対する政治的・社会的な制約、有毒物質の「許容値」という表現が含んでいる問題に関する社会学者ベックの考察に加え、水俣病被害者と加害企業との裁判闘争なども視野に入れ、筆者は、モ

主査記載 氏名（自署）	中　真生

ートンにおいては十分に主題化されていない「人間と非人間」との「非調和的な」関係がもたらす現実の深刻さ、「共存」を回復するための具体的方策の必要性を強調する。

第五章では、人間と非人間との関係をめぐる問題の最たるものとして生物多様性の急激な減少の問題が取り上げられる。筆者は、一方で、ダークエコロジーが主張するところとは異なり、自然環境は抵抗力と回復力を持っていることを、スウェーデンの環境学者ロックストロームなどの議論を踏まえつつ確認する。しかし、生物多様性の保全は可能能な事業ではあるが、そのためには、科学技術の合理的な利用だけでなく、社会的不公正と貧困の撲滅が必要であると論じる。

終章では、以上の議論を踏まえつつ、モートンのダークエコロジー思想の主眼は、世界と自己についての意識の仕方を変化させること、人間的尺度を超えた世界を考えるための主に感性的・芸術的方策の提示にあるが、水俣病被害や生物多様性の縮減といった深刻な現実を直視するならば、「人間と非人間との共存」という課題はモートンが示唆するほど単純ではないと結論づける。さらに、環境汚染、貧富の格差などの問題の解決には、緊急かつ本格的な取り組みが必要とされているが、SDGsの名のもとにおける、いわゆる「持続可能な開発」戦略は、資本主義的生産を維持・拡大する方法となっているのではないかとの疑問を提示し、今後の課題としている。

以上のように本論文は、現代の環境思想において議論の一つの的となっているモートンの「ダーク・エコロジー」思想の特長及び問題点を、石牟礼道子などによる関連著作と対比検討することを通じて、「人間と非人間のあいだ」の関係の複雑な諸相を明らかにし、そのありうべき「共存」の方向を探るという、きわめて大きな意義のある課題に取り込んだ意欲作である。取り上げられている思想・理論の概略を述べることに多くの紙幅が費やされており、著者自身の主張が十分に展開されていない箇所もあるが、主題と議論の基本的方向は高く評価される。「補論」は、福島や水俣でのフィールドワークで自らが感じ考えたことの大変貴重な報告となっており、今後のさらなる展開が期待される。以上の点から、本審査委員会は、論文提出者・張凌霄が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区分	職名	氏名（自署）	区分	職名	氏名（自署）
主査	教授	中 真生	副査	准教授	原口 剛
副査	教授	茶谷 直人	副査	広島市立大学客員研究員	熊谷信博
副査	講師	安倍 里美			